

京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

1. 研究課題

1920-30ドイツの精神分析の発展と社会理論への影響についての研究

On Developments of Psychoanalysis and its Influence on Social Theory in Interwar period Germany

2. 研究代表者氏名

上尾 真道

Masamichi Ueo

3. 研究期間

2018年12月 - 2019年03月

4. 研究目的

本研究の目的は、戦間期ドイツにおける精神分析の理論・実践・制度に関する発展について調査し、それらが広く社会理論へ与えた影響について細かな分析を行って、その実相を明らかにすることである。戦間期ドイツは、当時もっとも民主主義的な憲法と謳われたワイマール憲法のもとで、民衆の生き生きとした文化的実践が開花した時代であった。と同時に、第一次大戦が人々の心身に残した大きな傷跡と、やがて来る第二次大戦とファシズムの予兆とに挟まれて、暴力性や排他主義など、今日でも解決を見ない大きな課題に直面していた時代としても理解される。そうしたなかにあって、ドイツ語圏の精神分析は、一方で制度として、無料診療所の運営や、教育セミナーの開設など、社会的アクターとして定着していくと同時に、他方では、マルクス主義やその他の社会主義思想などの影響を通じて、創始者フロイトの着想から離陸するような、幾つかの新たな理論的展開をも示している。こうした多様な動きについて、これまで、社会史的観点も踏まえつつこれを総括的に捉える研究は行われてこなかったのに対し、本研究は、歴史的対象としての精神分析を細かく検討することで、現代社会にも光をあてるような、精神・社会の理論・制度的な節合関係を解明することを目指す。

5. 研究成果の概要

本共同研究では、これまで日本語圏においては基本的情報についてもほとんど知られていなかった、戦間期ドイツ語圏における精神分析の知的ネットワークの在りようを解明することに成功した。戦間期のドイツにおいては、ベルリンに設立されたインスティテュートを中心として精神分析の教育・養成のシステム構築が進められ、その専門性が高められていった一方で、かたやマルクス主義、かたやアメリカとの交流の影響関係のもとで、精神分析理論を社会改良

的思想傾向のうちで応用することに大きな期待が寄せられていた。こうした求心的運動と遠心的運動の両方を通じて、精神分析の内部には多くの新傾向が登場することとなったのであり、そのことは二〇世紀における精神分析の広範な思想的影響の真価をはかるうえでも、重要な出発点として再評価されねばならない。さらにこの時代の理論的改訂のひとつの傾向として、身体学や生理学への再注目が見られることも明らかとなり、文化的規範性が揺らいだ大衆の時代としての戦間期という主題とともに、今後、深めて考えるべき主題であるとの認識が共有された。

6. 共同研究会に関連した公表実績

特になし

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

四つの研究発表については、それぞれ論文化することを計画する。発表に際しては、研究の意義と位置付けに関する導入的論考を含め、いくつかの追加的な論考を加えた上で、ひとつの包括的な戦間期精神分析研究として公表することが望ましいと考えている。発表媒体については、『人文学報』など学術誌ないし商業誌での特集という形をとるか、あるいは今後さらに研究規模を広げることを前提として論集という形を目指すか、今後、検討する。また今後の展開として、今回のドイツ語圏を中心とした研究成果をもとに、戦間期の精神分析の発展を、イギリス、フランス、アメリカ、日本を含むより広域的視野で追跡する研究を実現したい。